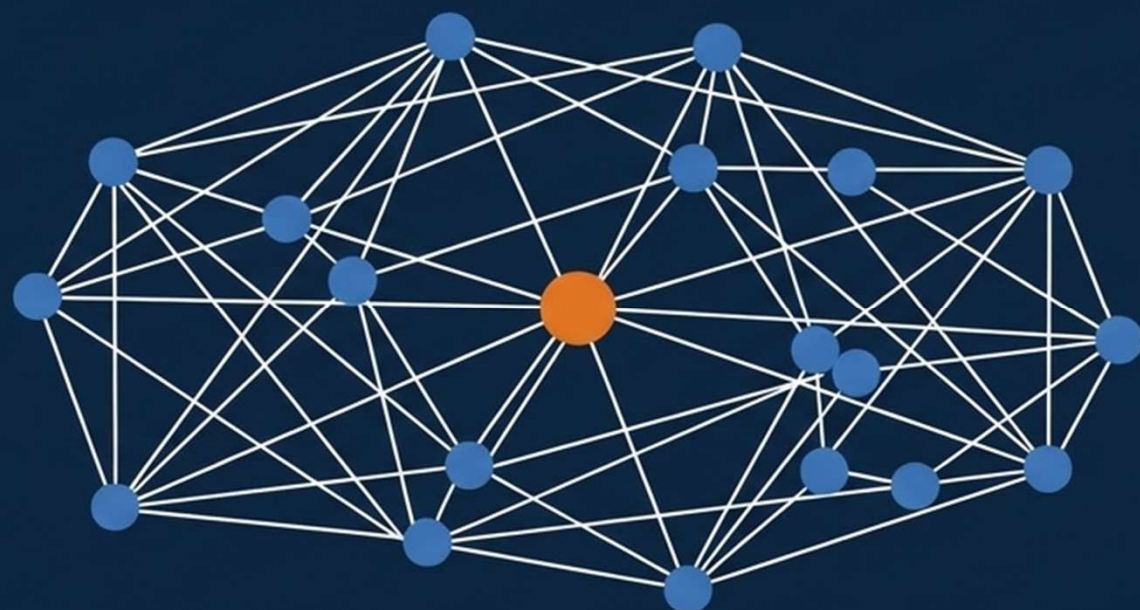


関係諸機関との連携をいかした実態把握と生徒支援 一人一人のニーズに応じた丁寧な支援の展開

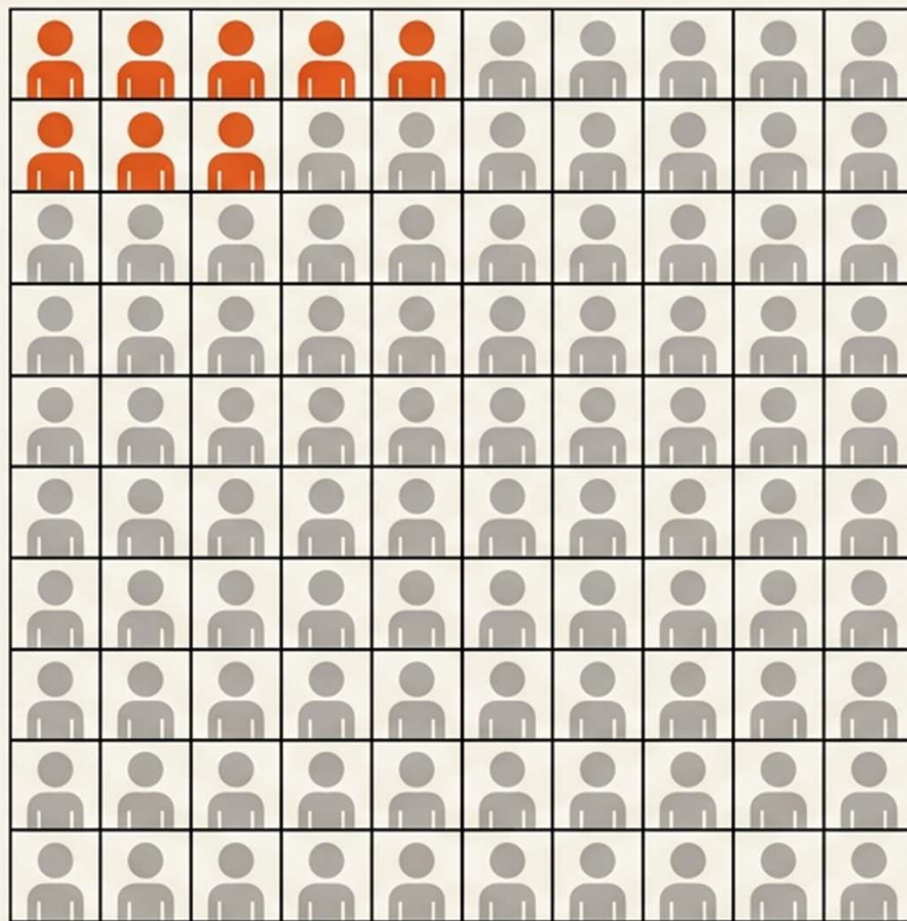


第65回 全日本特別支援教育研究連盟全国大会 新潟大会 第1分科会
分科会討議テーマ：校内支援委員会及び関係機関との連携における課題と解決方法
山梨県富士吉田市立明見中学校 教諭 親田 悠平

多様なニーズの増大と新たな支援体制の急務

多様化・複雑化する児童生徒のニーズに対し、教師一人の経験やスキルだけで対応することは極めて困難な時代。

「個」の努力から、関係機関を巻き込んだ「面」でのアプローチへの転換が求められている。



8.8%

2022年文部科学省調査：通常の学級に在籍する、学習面や行動面で著しい困難を示す児童生徒の割合

方針と中核となる役割

やまなし特別支援教育推進プラン2020



教師は「一人で抱え込む」のではなく、「適切な専門家へつなぐオーケストレーター（指揮者）」として機能することが重要。

本校特別支援学級の現状と、直面する「進路選択」

富士吉田市立富士見台中学校
特別支援学級

在籍生徒：2名（いずれも中学3年生）

中学3年生：
進路選択と
いう岐路

生徒A

難聴特別支援学級

生徒B

自閉症・情緒障害特別支援学級

両名とも、中学校卒業後の進路を見据え、個別の特性に応じた
環境調整と自己実現に向けた支援が急務となっている。

【実践事例①】 難聴の特性を示す生徒Aの実態

強み・ポジティブな面

- ✓ 学習に対して常に前向きに取り組む姿勢。
- ✓ 自立活動や取り出し授業における素直な吸収力。

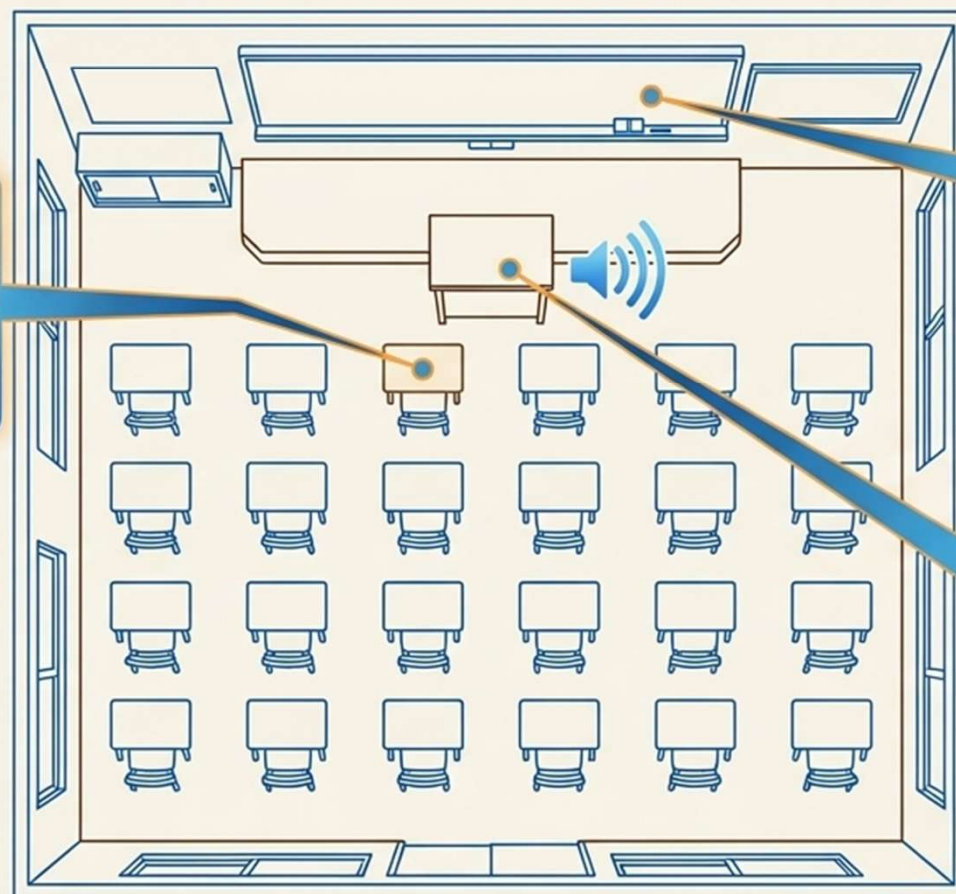
見えない障壁・課題

- ⚠ 高音や特定の「子音（サ行・タ行・ラ行）」の聞き取り困難（聞き間違いの発生）。
- ⚠ 補聴器の使用に対する「煩わしさ」や疲労感の増大、使用頻度の低下。
- ⚠ 集団授業における「聞こえづらさ」からくる学習意欲の低下リスク。

生徒Aへの支援①：ろう学校のセンター的機能の活用

座席配置と環境調整

教員の声が直接届きやすい前方座席の確保。



情報の視覚化

デジタル教科書など視覚的教材（ICT）の意図的な多用と、映像後の口頭補足。

発言の「復唱」

後方座席の生徒の発言は教員が必ず復唱して情報を保障する。

グループワークの工夫：
司会者を配置し、話者を明確にすることで意識を集中させる。

生徒Aへの支援②：医療連携と自立活動を通じた主体性の育成

一人一人に適した受検配慮の獲得

入試に向けた座席配置や放送種類など、様々なパターンを試し主体的に模索

医療機関との連携

- ✓ 定期的な通院による補聴器の調整。
- ✓ 専門的見地からのアドバイスを通じた、補聴器の「煩わしさ」の軽減と使用頻度増加へのアプローチ。

自立活動（自己理解と発信）

- ✓ 教科書の音読による発音と聞こえの確認。
- ✓ 自身の聞こえの特性を理解し、対話を通して担任と共有するコミュニケーション能力の向上。

【実践事例②】 登校困難と場面緘黙のある生徒Bの実態

特性と背景

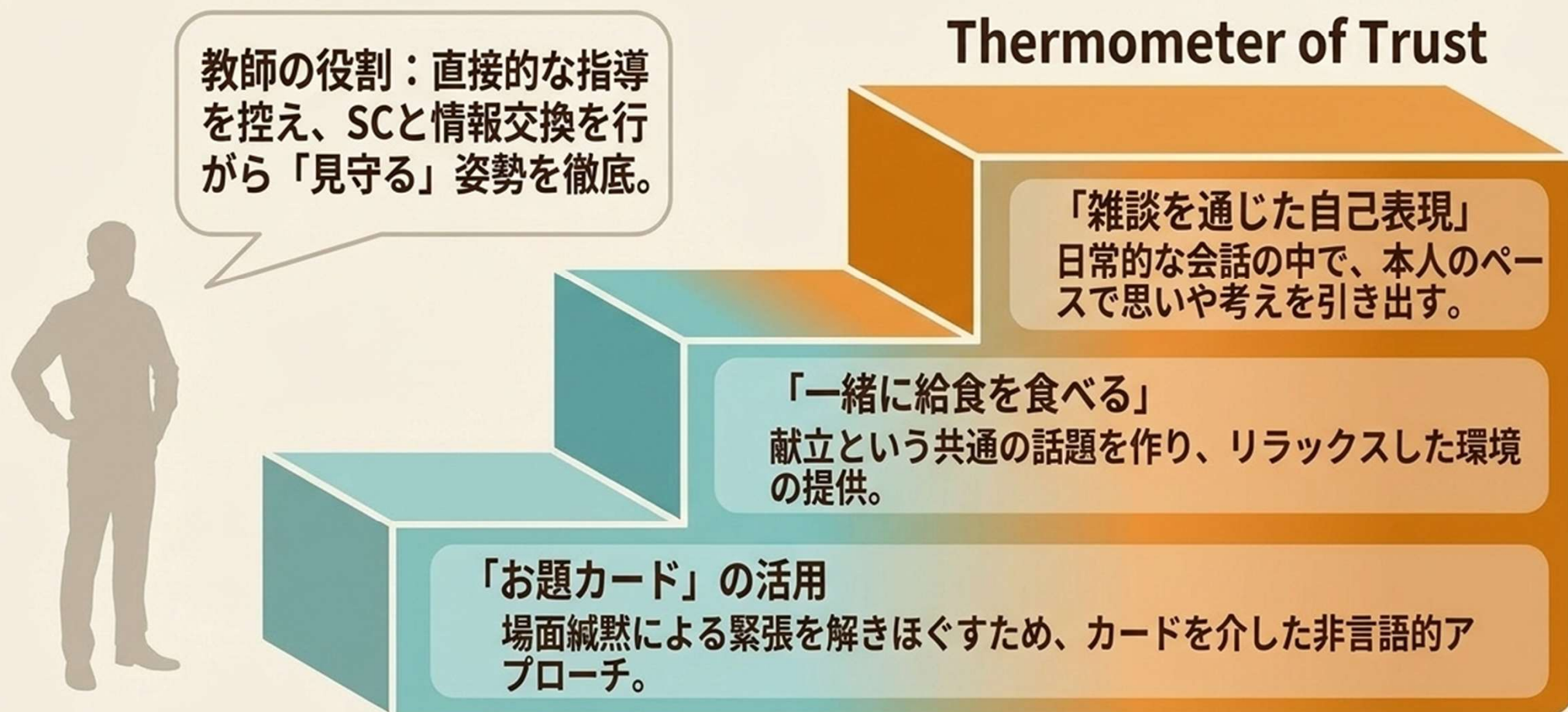
- ・ 自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍。
- ・ 場面緘黙があり、極度の緊張からコミュニケーションが困難になる特性。
- ・ 小学校高学年時より不登校となり、長期にわたり学校から離れていた。

直面していた課題

- ・ 中学校入学後も1年間は心理面・体調面が不安定で登校できず。
- ・ 「中学校卒業後の進路」という現実に対する強い不安と葛藤。
- ・ 社会との接点が極めて少なく、関係構築の再スタートが必要。

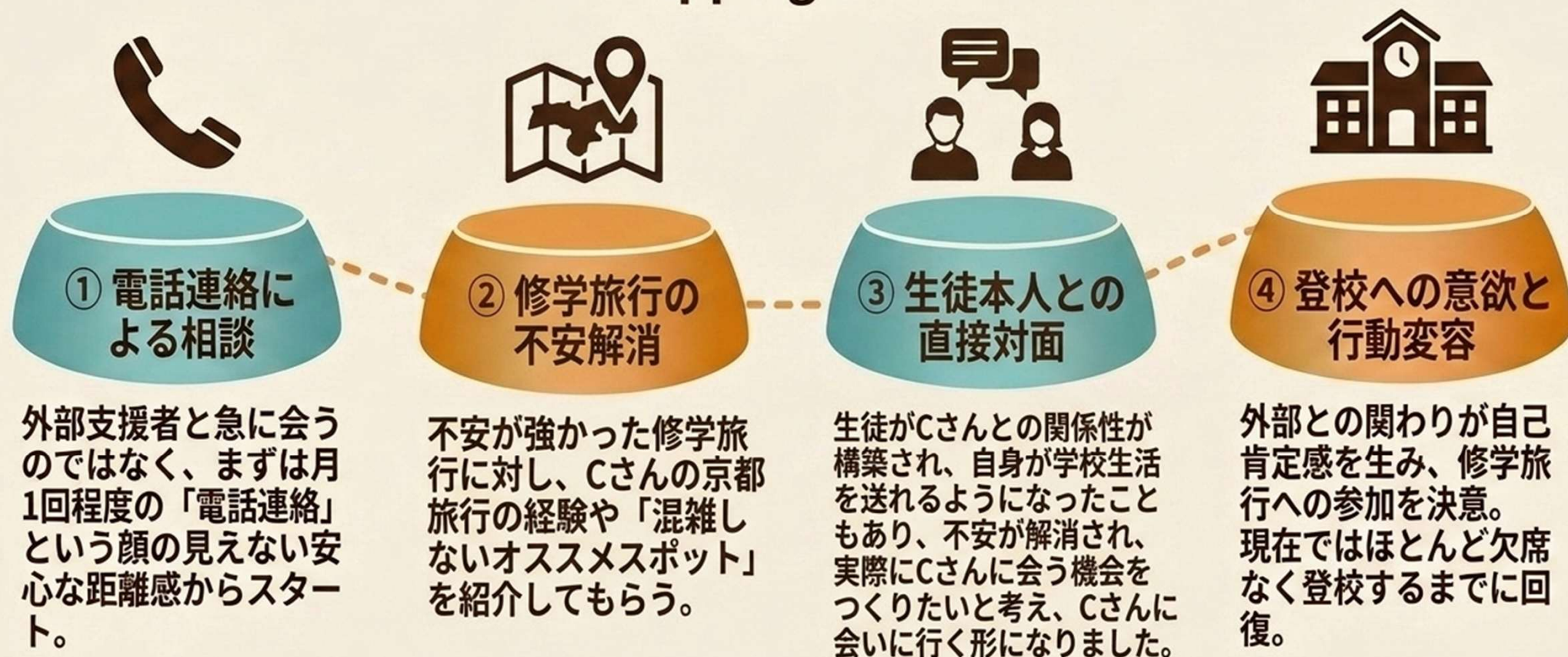
長期の空白期間

生徒Bへの支援①：スクールカウンセラー（SC）との信頼関係構築



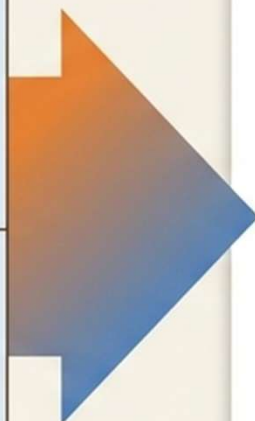
生徒Bへの支援②：地域支援者（Cさん）との段階的な連携プロセス

Stepping-Stone



実践の成果：多様なアプローチから導かれる一つの最適解

	外部機関	アプローチ	成果
生徒A (難聴)	ろう学校・医療	環境調整・ 視覚化	入試配慮 の獲得
生徒B (情緒)	SC・ 地域支援者	心理的安全性・ スモールステップ	登校意欲 の回復



子どもの笑顔をみんなで支援

「個別の教育支援計画」は、保護者を主とした教育、医療、福祉、保健、労働等の関係機関が、子どもの状況や障害特性、生活の困難・内面等の理解を共有し、適切な支援に必要な支援を行うためのチームです。その中核となるのは、関係機関との連携を深め、多くの子どもと関係する中で子どもの生活の充実を目指しています。

また、「個別の教育支援計画」などの支援チームを設け、障害児、障害児などに影響する、一人ひとりの支援方法や支援内容を具体的に検討させていただきます。

「個別の教育支援計画」への還元

支援計画の策定は、子どもの状況や障害特性、生活の困難・内面等の理解を共有し、適切な支援に必要な支援を行うためのチームです。その中核となるのは、関係機関との連携を深め、多くの子どもと関係する中で子どもの生活の充実を目指しています。

また、「個別の教育支援計画」などの支援チームを設け、障害児、障害児などに影響する、一人ひとりの支援方法や支援内容を具体的に検討させていただきます。

- ・手法は対極でも、フレームワークは同じ。
- ・教師一人の主観にとらわれない「多角的な実態把握」。
- ・多様な専門性の介入により、教員の孤立防止と精神的余裕の創出が実現。

今後の課題と展望：持続可能な「チーム学校」体制の深化



- ・関係諸機関との連携は、単なる「業務の分担」ではなく、生徒一人一人を中心に描く「支援の星座」づくりである。
- ・一過性の連携で終わらず、就学先・進学先へも切れ目なく情報を引き継ぐ持続可能な体制が不可欠。

「私たちは、自らの専門性の限界を認め、どれだけ他者の専門性をリスペクトし『つなぐ』ことができているのでしょうか？」